

シリーズ ここまでわかった考古学

弥生ムラの風景 —八尾南遺跡の最新成果—

2006年2月18日(土)～3月21日(火・祝)

(財)大阪府文化財センターでは、2002～2004年度に大和川改修事業に伴う八尾市八尾南遺跡の発掘調査を実施してきました。この調査では弥生時代後期前半の集落跡が良好な状態で発見され、当時の集落構成や建物遺構の構造を研究していくうえで、重要な情報を数多く得ることができました。

さて、この弥生時代後期は、古墳時代の幕開けを目前に弥生文化が^{へんぼう}変貌を遂げていく時期と考えられています。集落のあり方は、中期を通じて^{いよう}威容を誇った「拠点集落」と呼ばれる大型集落の多くが解体あるいは縮小し、比較的短期間の中・小規模集落が分散して営まれるようになります。また、丘陵や山地など、^{こうしよ}水稻農耕中心の生活には適していない高所に立地する集落が増加するのもこの時期です。

そこで今回の展示では、八尾南遺跡での最新の調査成果を中心に、大阪湾沿岸の弥生時代後期の集落遺跡をいくつか取り上げ、集落の^{のぞ}景観、すなわち「ムラの風景」を覗いてみたいと思います。



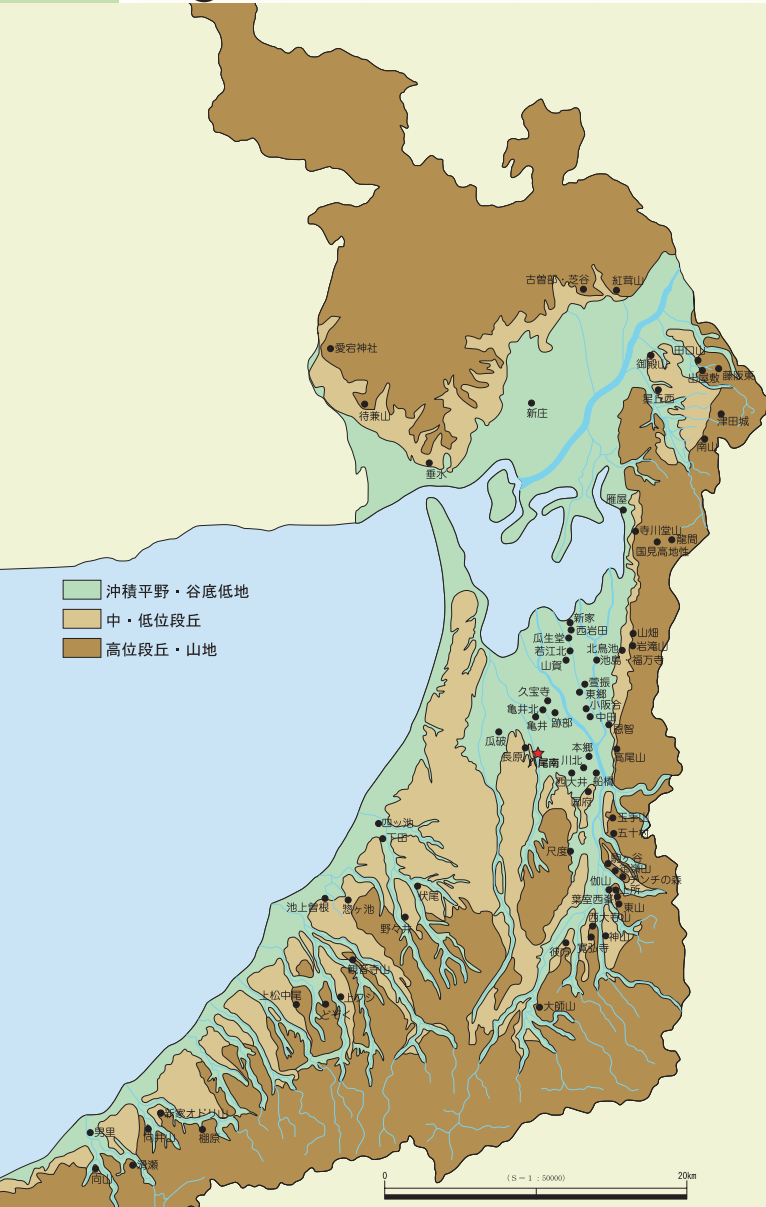
洪水砂の下から見つかった弥生時代後期の集落（東→西、写真左は大和川）〔八尾市 八尾南遺跡〕

1. 低地のムラの様相

弥生時代、現在「中河内」と呼ばれる地域の大部分は、かつての河内湾が、その入口の砂堆の発達により淡水化した河内湖とこれに注ぎ込む旧大和川流域の沖積低地によって占められていました。水稲耕作に適した低地を周囲に有する自然堤防上では、初期の農耕集落が小規模ながら営まれ始め、中期に入ると、それらの中から「拠点集落」とも呼ばれる地域の中核となる大型集落が現れてきます。

八尾市亀井遺跡は、河内湖南岸部最大の拠点的な集落で、居住域の外側に広がる方形周溝墓群を含めた範囲は、径500～700mに及ぶとされています。ただし、最近の研究では、集落は単一の集団によって営まれたものではなく、それぞれ墓域を伴った2つの居住域から構成されていることが指摘されています。この居住域は中期を通じて継続して営まれ、後期に至っても規模を縮小しつつ存続します。そのため、各時期の各種遺構が多数重なり合い、ムラ内部の詳しい状況は判っていません。

一方、亀井遺跡より北側の一段低い土地に立地する久宝寺遺跡では、地理的な不安定さを反映して居住域や墓域・水田域を頻りに移動させています。近年の水処理施設建設に伴う調査においても、後期から古墳時代前期にかけて、目まぐるしく土地利用を変えていた様子が明らかとなっています。



大阪府内の主要な弥生時代後期の遺跡



密集する弥生時代中期～後期の遺構〔八尾市 亀井遺跡〕



弥生時代中期～後期の水田〔八尾市 久宝寺遺跡〕

2. 丘のムラの様相

“倭国乱”。中国の史書『魏志』倭人伝^{ぎし わじんでん}では、2世紀後半のわが国で争乱が生じていたことをこのように表現しています。そして、この戦いを実証する考古学的な証拠として注目されてきたのが、弥生時代中期後半以降に西日本を中心に分布する「高地性集落」と呼ばれる丘陵や山頂に営まれた集落遺跡で、戦時における逃げ城^{とりで}や砦、あるいは通信機能を担った見張所などの性格が推測されています。

大阪湾沿岸においても、中期の終り頃から後期を通じて、段丘・丘陵上に立地する集落が増加します。ただし、標高100mをはるかに超えるような高所に所在する遺跡は少なく、周囲の低地との標高差が50m以内のなだらかな低丘陵上に営まれた集落が大部分です。集落の全体像が明らかとなった例は多くはありませんが、数棟の竪穴建物から構成される短期間の小規模なムラ〔上フジ〕、同一丘陵の尾根ごとに4～5棟の建物から構成される居住域が展開しているムラ〔駒ヶ谷^{こまがたに}〕、複数の丘陵にまたがって一時期に20棟以上の建物が存在する規模の大きなムラ〔寛弘寺^{かんこうじ}〕などがあり、集落の成立時期や継続期間にも違いが認められます。



丘陵上から谷部にかけて広がるムラ〔泉南市 滑瀬遺跡^{なめんじよ}〕



狭小な段丘上に営まれたムラ〔阪南市 向山遺跡^{むかいやま}〕



尾根の平坦部につくられた居住域〔羽曳野市 駒ヶ谷遺跡〕



検出された方形の竪穴建物〔羽曳野市 駒ヶ谷遺跡〕



八尾南ムラで使われた土器



堤を持つ井戸



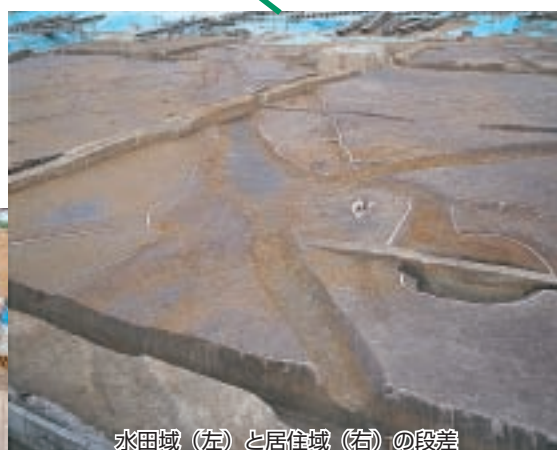
川の西側に広がる居住域



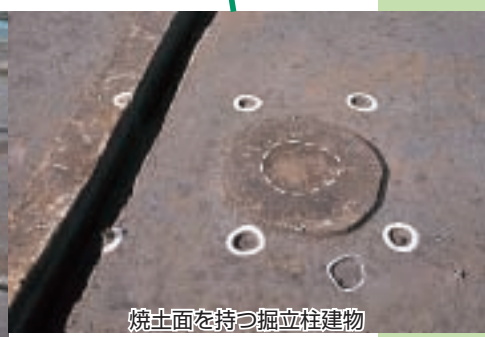
川岸に捨てられた土器



西側の低地につくられた水田



水田域 (左) と居住域 (右) の段差



焼土面を持つ掘立柱建物

3. 八尾南ムラの風景

八尾南遺跡は、前章でみた低地のムラにあたりますが、亀井遺跡より南側の、羽曳野丘陵に連なる標高の高い比較的安定した土地に位置しています。今回の調査では、水田域と居住域が見つかりました。

水田域は、居住域よりも10 cmほど低い西側の低地に広がります。水田は、^{あぜ}畦によって小さな区画に区切られており、大きな労力をかけなくてすむ小規模な耕地の造成により、傾斜のあるところでも水を均等に張れるように工夫されていました。

居住域は、南から北へ流れる幅10 m前後の川によって二分されます。竪穴建物は、川を境に西側に6棟、東側に4棟あり、この棟数は丘のムラでみた最小単位に近いと言えます。建物は、床面積の大きさから大(25畳)・中(15畳)・小(9畳)・極小(6畳)の4つに分けられますが、後に述べる竪穴外側の施設を含めると、建物1棟あたりの占める面積は4～5倍に広がります。八尾南ムラでは、最も多く見つかった小型の建物が一般の住まいであったと考えられ、これらは20 m以上の間隔を空けて建てられていました。また、生活上必要な水を得るための井戸が4基見つかったほか、建築材や農具の原材料となる木を蓄えておく施設も見つかりました。



川の東岸にある隣接する2棟の竪穴建物

検出された掘立柱建物

さらに、当時の表土を取り除くと、29棟の掘立柱建物が見つかりました。これらの掘立柱建物は竪穴建物と重ならず位置していました。竪穴建物とどのような使い分けをしていたのでしょうか。

トピックス ～土器に描かれた絵～

八尾南ムラからは、絵画土器やこれを省略した記号文土器が10数点出土しました。中でも、写真のように龍を描いたと思われるものが4点確認されています。

龍は、中国の古代思想で水や雨の象徴とみなされており、日本には銅鏡(方格規矩四神鏡^{ほうかくきくしんきょう})を通じて伝えられたのが始まりとされています。今回の資料も、竪穴建物の周溝や排水溝およびその周辺、井戸の中といった、いずれも水に関係する遺構から出土していることから、水に関わるマツリに用いられたものと考えられます。



龍を描いた土器



4. 竪穴建物の構造

八尾南ムラの竪穴建物には、円形・長方形・方形の3つの形がありますが、竪穴建物8（4頁遺構図を参照）を除く各建物の外周には、平面形に関係なく、断面台形状の高まりを巡らしていました。この高まりは、「^{しゅうてい}周堤」と呼ばれる建物内への雨水の流れ込みを防ぐための施設で、竪穴を掘った時に出た



周堤と周溝を持つ竪穴建物（竪穴建物7）

土を盛り上げて作っています。周堤の大きさは、裾の幅2～3m、高さは40cm前後であり、50～60cm掘り込まれた竪穴部分を合わせると、建物の深さは1m近くに達します。

また、周堤の外側には、深さ40～50cmの周溝が掘られていました。周溝には、一部で川とつながるものや建物床面より深いものがあることから、雨水の集排水や建物内の湿気よけなどの機能をもっていた可能性があります。

建物内部では、壁を保護するための保護材【**壁材**】、壁沿いに巡らす排水用の溝【**壁溝**】、さまざまな用途の穴【**中央土坑**】、水を流すための溝【**排水溝**】、出入りをするための施設【**はしご**】などの施設が、非常に良い状態で見つかりました。



壁溝に渡された蓋を支えるための横木（竪穴建物9）

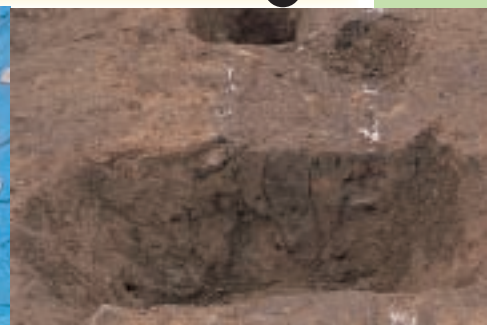
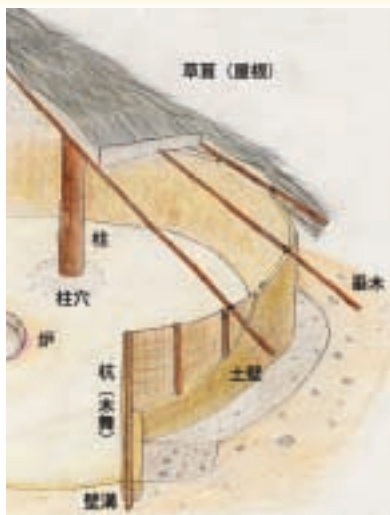
まず壁溝では、床から壁に水平に横木を渡した上に植物を敷き並べて蓋をしていた様子が判りました。一方、同じ壁溝でも泉南市の^{おのさと}男里遺跡（弥生時代中期）の建物では、壁溝内の^{こまい こんせき}杭（木舞）痕跡から、壁を立ち上げていた様子が復元されています。どうやら壁溝の性格も1つではないようです。これに近い構造は、茨木市の^{しんじょう}新庄遺跡（弥生時代後期）でも見つかっています。



壁際に立てかけられた梯子（竪穴建物9）



建物内の中央土坑と排水溝（竪穴建物9）



壁溝内の杭の痕跡

(上) 土壁造りと考えられる弥生時代中期の竪穴建物〔泉南市 男里遺跡〕

(左) 同竪穴建物の復元図

また、中央土坑からは、木を方形に組み合わせた箱状の構造物が見つかりました。この土坑は排水溝とつながり、排水溝は、壁にトンネルを掘って建物の外側へと続きます。中央土坑は、これまで建物で火を使うための炉と考えられてきました。しかし、今回みつかった構造物は、炉以外の機能もあったことを示しているのかもしれませんが。

このほか、建物の出入口は、上屋の構造とも関係して位置の特定が難しいものの一つですが、方形建物である竪穴建物9では、床面の角に据えつけられた梯子がみつかっており、出入口が特定できました。

最後に、建物の上屋の構造（屋根）について触れておきます。屋根は、建物遺構の一番大切な部分ですが、発掘調査では見つかることが少ないため、どのような構造をしていたのかはなかなか判りません。こうした問題について考古学的に重要な情報を与えてくれるのが、火災で焼け落ちた建物です。焼失建物と呼ばれるこの種の建物では、下の写真のように、炭になった木材が床に放射状に残っていることが多く、その大半は、屋根の支えとなる垂木や上に葺いていた茅などの草屋根が焼け落ちたものと言われています。一方、炭化材のほかに焼土の塊が見つかる焼失建物もあり、屋根の上に土を被せていた土屋根の可能性が、早くから指摘されてきました。この考えは、群馬県の火山灰に埋もれた古墳時代の遺跡ではじめて確かめられましたが、縄文時代から弥生時代の建物にも存在していることが、各地の焼失建物の詳しい分析を通じて実証されつつあります。このように、研究の進展によって、屋根の葺き方にも草葺きと土葺きの大きく2つの種類があることが判ってきました。



建築部材が残った焼失竪穴建物〔八尾市 長原(城山)遺跡〕



復元された土屋根の竪穴建物〔鳥取県 妻木晩田遺跡〕



5. 八尾南ムラの終焉^{しゅうえん}

八尾南ムラが営まれた期間は、出土した土器から見て短く、ムラ人たちは生活用具や屋根材・柱などの大きな建築部材を携えてどこかへ移動したようです。主のいなくなったムラはやがて水没し、その後起こった洪水^{こうずい}で運ばれてきた大量の土砂によって、地中深く埋没してしまいました。

弥生時代後期末から古墳時代初め、この洪水砂の上に方形周溝墓^{しゅうこうぼ}が相次いで造られ、調査地付近は居住域から墓域へと変わりました。周溝墓は40基近く見つかかり、中には一辺の中央に開口部^{りっきょう}（陸橋）を設け、両側の周溝の端を拡張あるいは屈曲^{くつきよく}させた前方後方形の墓も存在します。また、周溝や近くの溝には、周溝墓の上で行った葬送儀礼^{そうそうぎらい}に用いられたと考えられる大量の土器が捨てられていました。



洪水砂の上につくられた方形周溝墓（古墳時代初頭）



溝に捨てられた大量の土器（古墳時代初頭）

会期内行事（弥生文化博物館 1階ホール）

■ 調査成果報告会

3月5日 「土器に描かれた絵」（14：00～16：00）

正岡 大実〔(財)大阪府文化財センター〕

■ ミニシンポジウム（資料代は別途必要）

3月12日 「弥生後期集落の景観」（13：00～16：00）

小山田 宏一〔大阪府立弥生文化博物館〕（コーディネーター）

高田 健一〔鳥取大学地域学部地域環境学科〕

岡村 渉〔静岡市役所市民局文化スポーツ部文化財課〕

岡本 淳一郎〔(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所〕

土井 孝之〔(財)大阪府文化財センター〕

岡本 茂史〔(財)大阪府文化財センター〕

大阪府立弥生文化博物館平成18年冬季企画展／(財)大阪府文化財センター小テーマ展示

シリーズ ここまでわかった考古学 弥生ムラの風景 -八尾南遺跡の最新成果-



主催／大阪府立弥生文化博物館・財団法人 大阪府文化財センター

編集／財団法人 大阪府文化財センター

発行／2006年2月18日

〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号

印刷／(株)中島弘文堂印刷所

本事業は、平成17年度文化庁埋蔵文化財保存活用整備事業国庫補助金によるものです。